

# 毒蛾

宮沢賢治

青空文庫



私は今日のひるすぎ、イーハトブ地方への出張から帰ったばかりです。私は文部局の巡回視学官ですから、どうしても始終出張ばかりしてゐます。私が行くと、どこの学校でも、先生も生徒も、大へん緊張します。

さて、今度のイーハトブの旅行中で、私は大へんめづらしいものを見ました。新聞にも盛んに出てゐましたが、あの毒蛾どくがです、あれが実にひどくあの地方に発生したのです。

殊はげに烈はげしかったのは、イーハトブの首都のマリオです。私が折をりかばんを下げ、マリオの停車場に下りたのは、丁度いまごろ、

灯がやっとなつた所でしたが、ホテルへ着いて見ると、この暑い

のに、窓がすっかり閉めてあるのです。マリオは、こゝから三百里も北ですから、よほど涼しい訳ですが、やつぱり仲々蒸し暑いのですからね、私は給仕に、

「おいどうしたんだ。窓をあけたらいゝぢやないか。」と云つたんです。すると給仕はてかてかの髪を一寸撫ちよつとなでて、

「はい、誠にお気の毒でございりますが、当地方には、毒蛾がひどく発生して居をりまして、夕刻からは窓をあけられませんのでございませう。只ただいま今、扇風機を運んで参ります。」と云つたのでした。

なるほど、さう云つて出て行く給仕を見ますと、首にまるで石の環わをはめたやうな厚い繃はうたい帯をして、顔もだいぶはれてゐましたからきつと、その毒蛾に噛かまれたんだと、私は思ひました。と

ころが、間もなく隣りの室<sup>へや</sup>で、給仕が客と何か云ひ争つてゐるやうでした。それが仲々長いし烈しいのです。私は暑いやら疲れたやら、すっかりむしやくしやししてしまひましたので、今のうち一寸床屋へでも行つて来ようと思つて室を出ました。そして隣りの室の前を通りかゝりましたら、扉<sup>と</sup>が開け放してあつて、さっきの給仕がひどく悄<sup>しよげ</sup>気て頭を垂れて立つてゐました。向ふには、髪もひげもまるで灰いろの、肥<sup>ふと</sup>つたふくろふのやうなおぢいさんが、安<sup>あんらくいす</sup>楽椅子にぐったり腰かけて、扇風機にぶうぶう吹かれながら、「給仕をやつてゐながら、一通りのホテルの作法も知らんのか。」と頬<sup>ほほ</sup>をふくらしして給仕を叱<sup>しか</sup>りつけてゐました。私は、ははあ扇風機のことだなと思ひながら、苦笑ひをしてそこを通り過ぎようと

しますと、給仕がちよつとこつちを向いて、いかにも申し訳けな  
いといふやうに眼めをつぶつて見せました。私はそれですつかり気  
分がよくなったのです。そして、どしどし階段を踏んで、通りに  
下りました。

なるほど、毒蛾のことがわかつて町をあるくと、さつき停車場  
からホテルへ来る途中、いろいろ変に見えたけしきも、すつかり  
もつともと思はれたのです。第一、人道にたくさんたき火のあと  
のあること、第二繃帯をしたり白いきれで顔を擦こすったりして歩く  
人の多いこと、第三並木のやなぎに石油ランプがぶらさがってゐ  
ることなどです。私は一軒の床屋に入りました。マリオの町だ  
なんて、仲々大きな床屋がありますよ。向側の鏡が、九枚も上手に

継いであつて、店が丁度二倍の広さに見えるやうになつて居り、糸杉いとすぎやこめ梅つがの植木鉢うゑきばちがぞろつとならび、親方はもちろん理髪アーティストで、外にもアーティストが六人もゐるんですからね、殊に技術の点になると、実に念入りなもんでした。

「お髪はくしこの通りの型でよろしうございますか。」私が鏡の前の白いきれをかけた上等の椅子いすに座つたとき、一人のアーティストが私にたづねました。

「えゝ。」私は外のことを考へながらぼんやり返事をしました。するとそのアーティストは向ふで手のあいてゐる二人のアーティストを指で招きながら云ひました。

「どうだらう。お客さまはこの通りの型でいゝと仰おつしやるが、

君たちの意見はどうだい。」

二人は私のうしろに来て、しばらくじつと鏡にうつる私の顔を見てみました。そのうち一人のアーティストが、白服の腕を胸に組んで答へました。

「さあ、どうかね、お客さまのお顎あごが白くて、それに円くて、大へん温和おとなしくいらつしやるんだから、やはりオールバックよりはネオグリークの方が調和がいゝぢやないかな。」

「うん。僕ぼくもさう思ふね。」も一人も同意しました。私の係りのアーティストがもちろんといふやうに一寸ちよつと笑つて、私に申しました。

「いかゞでございます、たゞいまのお髪くしの型よりは、ネオグリー



クの方がお顔と調和いたしますやうでございしますが。」

「さうですね、ぢやさう願ひませうか。」私も叮寧に云ひました。それはこの人たちがみんな芸術家なからです。

さて、私の頭はずんずん奇麗になり、気分も大へん直りました。これなら、今夜よく寝やすんで、あしたはマリオ農学校、マリオ工学校、マリオ商学校、三つだけ視みて歩いてても大丈夫だと思つて、気もちよく青い植木鉢うゑきばちや、アーティストの白い指の動くのや、チヤキチヤキ鳴る鋏はさみの銀の影をながめて居りました。

すると俄にはかに私の隣りの人が、

「あ、いけない、いけない、たうとうやられた。」とひどく高い声で叫んだのです。

びつくりして私はそつちを見ました。アーティストたちもみな馳<sup>は</sup>せ集つたのです。その叫んだ人は、たしかマリオ競馬会の会長か、幹事か技師長かだつたでせうがひげを片つ方だけ剃<sup>そ</sup>つた立派な紳士でした。どうしてその人が競馬の何かだといふことがわかつたかと云ひますと、実はその人の胸に蹄<sup>ていてつ</sup>鉄の形の徽<sup>きしやう</sup>章のついてゐたのを、さつき私は椅子にかける前ちやんと見たのです。とにかくその人は、全く怖<sup>おそ</sup>ろしさうに顔をゆがめてゐました。

「どこへさはりましたのですか。」たしかに親方のアーティストらしい麻のモーニングを着た人が、大きなフラスコを手にしてみんなを押し分けて立つてゐました。そのうちに二三人のアーティストたちは、押虫網でその小さな黄色な毒蛾<sup>どくが</sup>をつかまへてしまひ

ました。

「こゝだよ、こゝだよ。早く。」と云ひながら紳士は左の眼の下を指しました。親方のアーティストは、大急ぎで、フラスコの中の水を綿にしめしてその眼の下をこすりました。

「何だいこの薬は。」紳士が叫びました。

「アムモニア二%液」と親方が落ち着いて答へました。

「アムモニアは利かないって、今朝の新聞にあつたぢやないか。」紳士は椅子いすから立ちあがって親方に詰め寄りました。この紳士は桃色のシャツでした。

「どの新聞でご覧です。」親方は一層落ちついて答へました。

「イーハトブ日日新聞だ。」

「それは間違ひです。アムモニアの効くことは県の衛生課長も声明してゐます。」

「あてにならんさ。」

「さうですか。とにかく、だいぶ腫<sup>は</sup>れて参つたやうです。」親方のアーティストは、少ししやくにさはつたと見えて、ピイツとうしろを向いて、フラスコを持ったまゝ向ふへ行つてしまひました。紳士は

「弱つたなあ、あしたは僕は陸軍の獣医たちと大事な交際があるんだ。こんなことになつちや、まるで向ふの感情を害するだけだ。困つたなあ。」と云ひながら、ずんずん赤くはれて行く頬<sup>ほほ</sup>を鏡で見てゐました。向ふで親方がまだ腹が立ってゐると見えて、斯<sup>か</sup>う

云つたのです。

「なあに毒蛾なんか、市中<sup>いたところ</sup>到る処に居るんだ。私の店だけに来たんぢやないんだ。毒蛾についちやこつちに何の責任もないんだ。」

紳士は、<sup>しぶしぶ</sup>渋々、又椅子に座つて、

「おい、早くあとをやつてしまつて呉れ早く。」と云ひました。

そして、しきりに変な形になつて行く顔を気にしながら、残りの半分のひげを剃<sup>そ</sup>らせてゐました。

私の方のアーティストは、しきりに時計を見ました。そして無<sup>む</sup>暗<sup>やみ</sup>に急ぎました。

まるで私の顔などは、二十五秒ぐらゐで剃<sup>かみそり</sup>つてしまつたのです。剃<sup>かみそり</sup>刀がスキーをやるやうに滑<sup>すべ</sup>るのです。その技術には全く感心

しましたが、又よほど恐こはかつたのです。

「さあお洗ひいたしませう。」

私は、大理石の洗面器の前に立ちました。

アーティストは、つめたい水でシャアシャアと私の頭を洗ひ時々は指で顔も拭ぬぐひました。

それから、私は、自分で勝手に顔を洗ひました。そして、も一度椅子にこしかけたのです。

その時親方が、

「さあもう一分だぞ。電気のあるうちに大事なところは済ましちまへ。それからアセチレンの仕度はいゝか。」

「すっかり出来てゐます。」小さな白い服の子供が云ひました。

「持って来い。持って来い。あかりが消えてからぢや遅いや。」  
親方が云ひました。

そこでその子供の助手が、アセチレン燈を四つ運び出して、鏡の前にならべ、水を入れて火をつけました。烈しく鳴って、アセチレンは燃えはじめたのです。その時です。あちこちの工場の笛は一斉に鳴り、子供らは叫び、教会やお寺の鐘まで鳴り出して、それから電燈がすつと消えたのです。電燈のかはりのアセチレンで、あたりがすつかり青く変りました。

それから私は、鏡に映つてゐる海の中のやうな、青い室の黒く透明なガラス戸の向ふで、赤い昔の印度インドをしの偲しのばせるやうな火が燃されてゐるのを見ました。一人のアーティストが、そこでしきり

に薪まきを入れてゐたのです。

「ははあ、毒蛾どくがを殺す為ためですね。」私はアーティストに斯かう言ひました。

「さやうでございます。」アーティストは、私の頭に、金口の瓶びんから香水をかけながら答へました。それからアーティストは、私の顔をも一度よく拭ぬぐつて、それから戸口の方をふり向いて、

「さあ、出来たよ、ちよつとみんな見て呉れ。」と云ひました。

アーティストたちは、あるいは戸口に立ち、あるいははたき火のそばまで行つて、外の景色をながめてゐましたが、この時大急ぎでみんな私のうしろに集まりました。そして鏡の中の私の顔を、それはそれは真面目まじめな風で検しらべました。



「いゝやうだね。」アーティストたちは口口に言ひました。私はそこで椅子いすから立ちました。銀貨を一枚払ひました。そしてその大きなガラスの戸口から外の通りに出たのです。

外へ出て見て、私は、全くもう一度、変な気がして、胸の躍るのをやめることができませんでした。さうでせう、マリオの市のやうな大きな西洋造りの並んだ通りに、電気が一つもなくて、並木のやなぎには、黄いろの大きなラムプがつるされ、みちにはまつ赤な火がならび、そのけむりはやさしい深い夜の空にのぼつて、カシオピアもぐらぐらゆすれ、琴座も臙おぼろにまたゝいたのです。どうしてもこれは遙はるかの南国の夏の夜の景色のやうに思はれたのです。私はひとりホクホクしながら通りをゆつくり歩いて行きま

した。いろいろな羽虫が本当にその火の中に飛んで行くのも私は見ました。また、繻帯はうたいをしたり、きれを顔にあてたりしながら、まちの人たちが火をたいてゐるのも見ました。

そのうちに、私は向ふの方から、高い鋭い、そして少し変な力のある声が、私の方にやって来るのを聞きました。だんだん近くなりますと、それは頑ぐわん丈ちやうさうな変に小さな腰の曲つたおぢいさんで、一枚の板きれの上に四本の鯨油げいゆらふそく蠟燭をともしたのを両手に捧げてしきりに斯かう叫んで来るのでした。

「家の中の燈火あかりを消せい。電燈を消してもほかのあかりを点つけちやなんにもならん。家の中のあかりを消せい。」

あかりをつけてゐる家があるとそのおぢいさんはいちいちその

戸口に立って叫ぶのでした。

「家の中のあかりを消せい。電燈を消してもほかのあかりをつけちやなんにもならん。家の中のあかりを消せい。」その声はガラんとした通りに何べんも反響してそれから闇やみに消えました。

この人はよほどみんなに敬はれてゐるやうでした。どの人もどの人もみんな町寧におじぎをしました。おぢいさんはいよいよ声をふりしぼって叫んで行くのでした。

「家の中のあかりを消せい。電燈を消してもほかのあかりをつけちやなんにもならん。家の中のあかりを消せい。いや、今晚は。」叫びながら右左の人に挨拶あいさつを返して行くのでした。

「あの人は何ですか。」私は一人の町の人にたづねました。

「撃劍の先生です。」その人は答へました。

「あの床屋のアセチレンも消されるぞ。今度は親方も、とても敵かなふまい。」私はひとりで晒わらひました。それからみちを三四遍きいて、ホテルに帰りました。室へやにはほんの小さな蠟ろうそく燭が一本点ついて、その下に扇風機が置いてありました。私は扇風機をかけ、氣持よく休み、それから給仕が来て「お食事は」とたづねましたので牛乳を持って来て貰もらって、それを呑のんでゐるうちに、電燈も又点きましたから、あしたの仕度を少しして、その晩は寝やすみました。次の朝、私はホテルの広場で、マリオ日日新聞を読みました。三面なんかまるで毒蛾どくがの記事で一杯です。

その中に床屋で起つたやうなことも書いてありました。殊にア

ムモニアの議論のことまで出てみましたから、私はもうてつきりあの紳士のことだと考へました。きつと新聞記者もあの九つの椅子<sup>い</sup>のどれかに腰掛けて、じつとあの問答をきいてゐたのです。また一面にはマリ才高等農学校の、ブンゼンといふ博士の、毒蛾に関する論文が載つてゐました。

それによると、毒蛾の鱗<sup>りん</sup>粉<sup>ぶん</sup>は顕微鏡で見ると、まるで槍<sup>やり</sup>の穂のやうに鋭いといふこと、その毒性は或<sup>ある</sup>いは有機酸のためと云ふが、それ丈<sup>だ</sup>けとも思はれないといふこと、予防法としては鱗粉がついたら、まづ強く擦<sup>こす</sup>つて拭<sup>ふ</sup>き取るのが一等だといふやうなことがわかるのでした。

さて私はその日は予定の視察をすまして、夕方すぐに十里ばか

り南の方のハームキヤといふ町へ行きました。こゝには有名なコ  
ワツク大学校があるのです。

ハームキヤの町でも毒蛾うはさの噂うはさは実に大へんなものでした。通り  
にはやはりたき火の痕あともありましたし、電気会社には、まるで燈  
台で使ふやうな大きなラムプを、千燭しよくの電燈の代りに高く高く吊つる  
してゐるのも私は見ました。また辻つじ々つじには毒蛾の記事に赤イン  
クで圏点をつけたマリオの新聞もはられてゐました。けれども奇  
体なことは、此この町に繻帶はうたいをしてゐる人も、きれで顔を押へて  
ゐる人も、又実際に顔や手が赤くはれてゐる人も一人も見あたら  
ないことでした。

きつとこの町にはえらい医者が居て治療の法が進んでゐるんだ

と私は思ひました。

その晩、その町で電燈が消え、たき火が燃されたことはすつかり前の晩と同じでした。けれども電燈の長く消えてゐたこと、たき火の盛んなこととてもマリオよりはひどかったのです。私は早く寝んで、次の日朝早くからコワツク大学校の視察に行きました。

大学校は、やっぱり大学校で、教授たちも、巡回視学官の私などが行つたからと云つて、あんまり緊張をすでもなし、少し失敬ではありましたが、まあ私はがまんをしました。

それからだんだんまはつて行つて、その時は丁度十時頃でしたが、一つの標本室へ入つて行きましたら、三人の教師たちが、一つの顕微鏡を囲んで、しきりにかはるがはるのぞいたり色素をデ

ツクグラスに注いだりしてゐました。

校長が、みんなを呼ぼうとしたのを、私は手で止めて、そつとそのうしろに行つて見ました。やっぱり毒蛾どくがの話です。多分毒蛾の鱗粉りんぷんを見てゐるのだと私は思ひました。

「中軸はあるにはありますね。」

「その中軸に、酸があるのぢやないですか。」

「中軸が管になつて、そこに酸があつて、その先端が皮膚にささつて、折れたとき酸が注ぎ込まれるといふんですか。それなら全く模型的ですがね。」

「しかしさうでないとも云へないでせう。たゞ中軸が管になつてゐることと、その軸に酸が入つてゐることが、証明されないだけ



です。」

「メチレンブリーユの代りに、青いリトマスを使って見たらどうですか。」

「さうですね。」一人が立って、リトマス液を取りに行かうとして、私にぶつつかりました。

「文部局の巡回視学官です。」校長がみんなに云ひました。みんなは私に礼をしました。

「どうです。そのリトマスの反応を拝見したいものですが。」私は笑って申しました。

青いリトマス液が新らしいデックグラスに注がれました。

「顕著です。中軸だけ赤く変つてゐます。」その教授が云ひまし

た。

「どれ拝見。」私もそれをのぞき込みました。

全く槍のやうな形の、するどい鱗粉が、青色リトマスで一帯に青く染まつて、その中に中軸だけが暗赤色に見えたのです。

「いや、ありがたう。大へんないゝものを拝見しました。どうです。学校にも大分被害者があつたでせう。」私は云ひました。

「いゝえ。なあに、毒蛾なんて、てんでこの町には発生でなかつたんです。昨夜、こいつ一疋ひき見つけるのに、四時間もかかったので。」

一人の教授が答へました。

そして私は大声に笑つたのです。





# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1979（昭和54）年7月15日初版第1刷

1983（昭和58）年12月20日初版第6刷

※底本は旧仮名ですが、拗促音は小書きされています。これになり、ルビの拗促音も、小書きにしました。

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2008年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 毒蛾

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>